

【資料1】

和光市調査からうかがえる 市民の意識の概要

～2012年度 市民調査の結果（速報値）より～

2013/1/22

東京都健康長寿医療センター研究所
社会参加と地域保健研究チーム

本調査は、平成24年度老人保健健康増進
等事業の助成を受けて実施したものです。

藤原 佳典
(代理報告者:小林)

I 調査の目的

和光市健康づくり条例にむけて、世代を通して住民がもつ、健康で安心な暮らしについての意識や実態を、特に、人や地域のつながり（社会的な環境）の側面に注目して明らかにすること。

Ⅱ 調査の方法

- ☞ 『シニア世代の安全・安心な暮らしに関する調査』（シニア調査）
 - 65歳以上の和光市民11,172人（要介護4・5と施設入居者を除き、全数調査）
 - 2012年7月～9月、原則として郵送式
 - 回収数 8,304票（回収率74.3%）

- ☞ 『地域の絆と安心な暮らしに関する調査』（ライフステージ別調査）
 - 無作為抽出された20～64歳の和光市民4,000人
 - 調査時期：2012年10月～11月、郵送式
 - 回収数 1,435票（回収率35.9%）

※調査票点検未完了につき、有効回収数は上記より減る見込み

集計方法

∞ 年齢層別

- 高年層：65歳以上（シニア調査）
- 中年層：40～64歳（ライフステージ別調査）
- 若年層：20～39歳（同上）

∞ エリア別

- 北エリア：新倉1-8丁目、下新倉1-6丁目
- 中央エリア：中央1-2丁目、本町、広沢、
西大和団地、丸山台1-3丁目
- 南エリア：白子1-4丁目、南1-2丁目、諏訪、
諏訪原団地

参考：エリア別回答者数

	北エリア	中央エリア	南エリア	計
高年層 65歳以上	2,443 (29.4%)	2,336 (28.2%)	3,517 (42.4%)	8,296 (100.0%)
中年層 40～64歳	247 (31.0%)	252 (31.6%)	298 (37.4%)	797 (100.0%)
若年層 20～39歳	226 (37.9%)	202 (33.9%)	168 (28.2%)	596 (100.0%)

※年齢・エリア不明者を除く

Ⅲ 調査結果



1. 孤立の状況



2. 栄養・運動

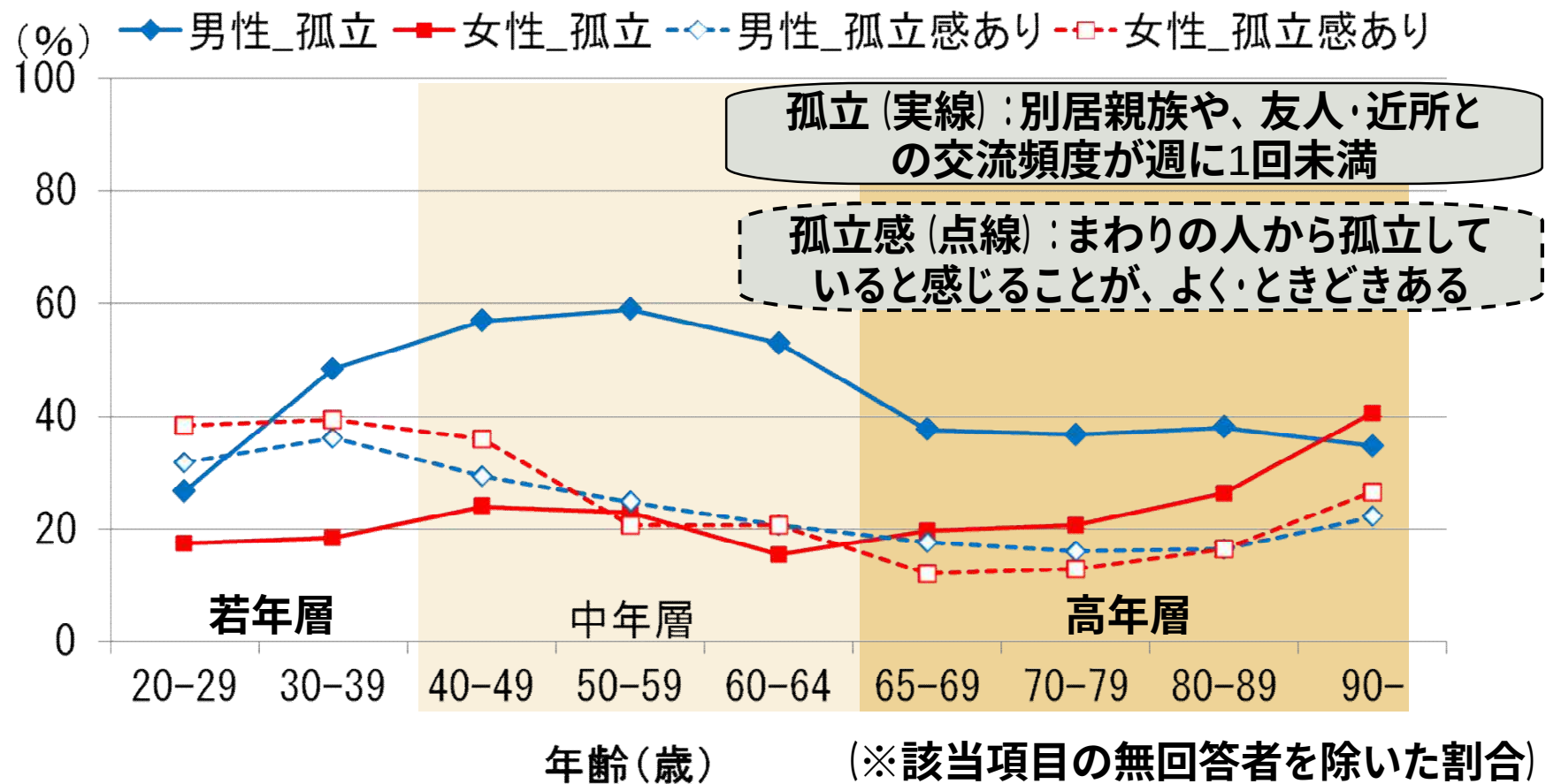
3. 団体・公的機関とのつながり

4. 居住地域の評価

5. 今後の生活への不安

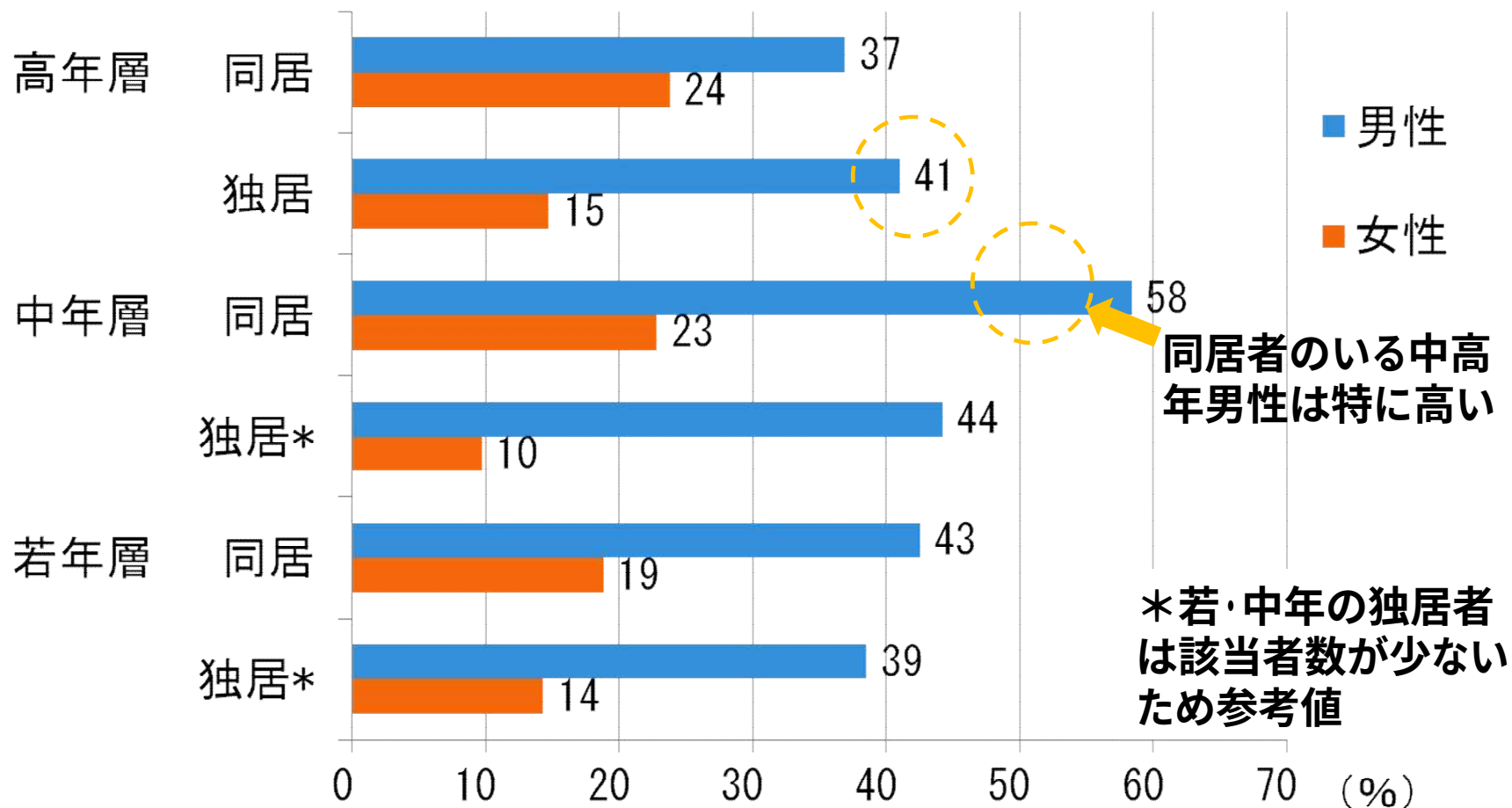
【性・年齢別】

孤立者の割合・孤立を感じる割合



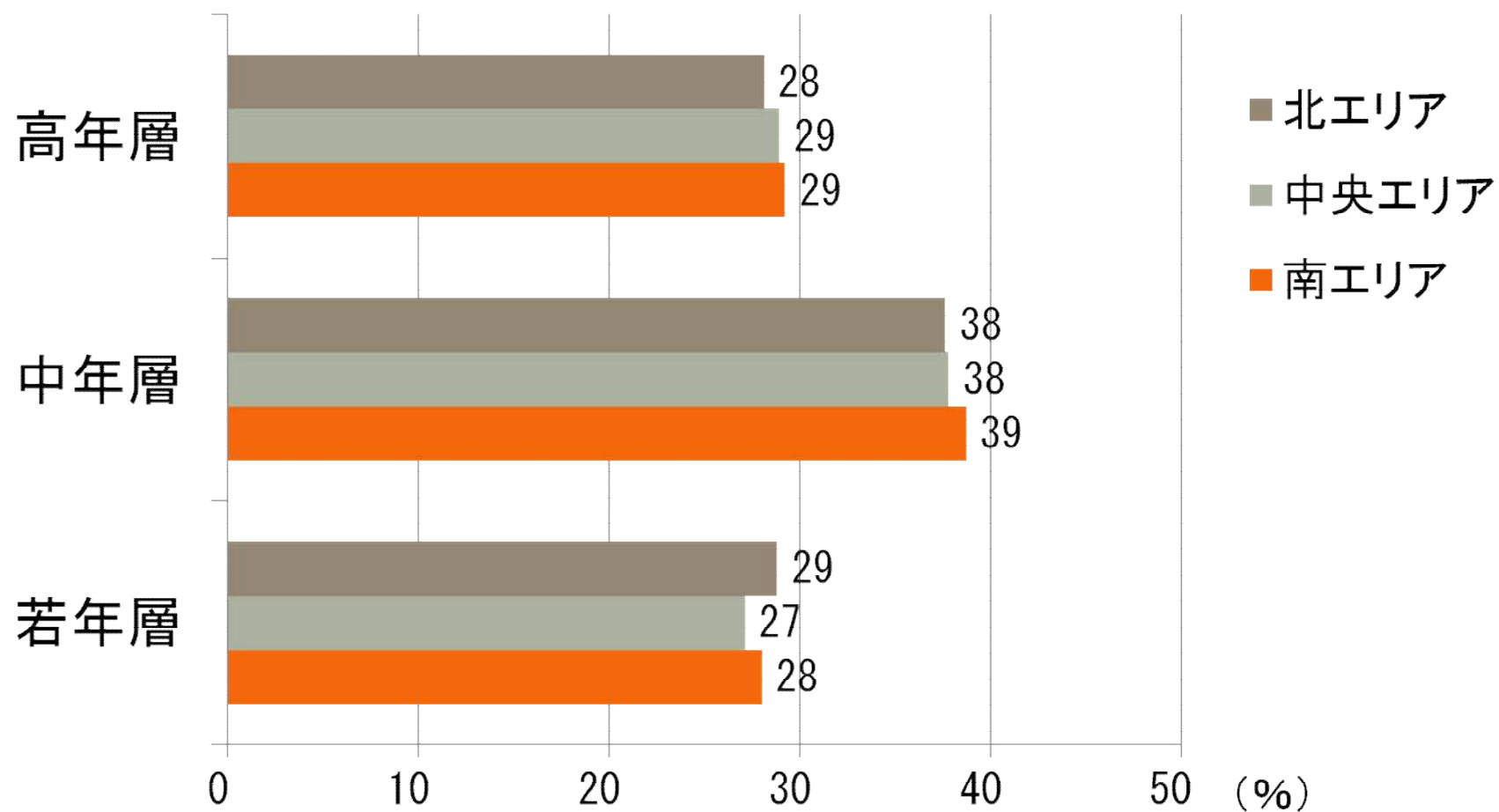
➡ 女性より男性、特に中年男性の「孤立」割合が高い。
仕事中心の生活を送っているため？

【年齢・世帯・性別】 孤立者の割合（％）



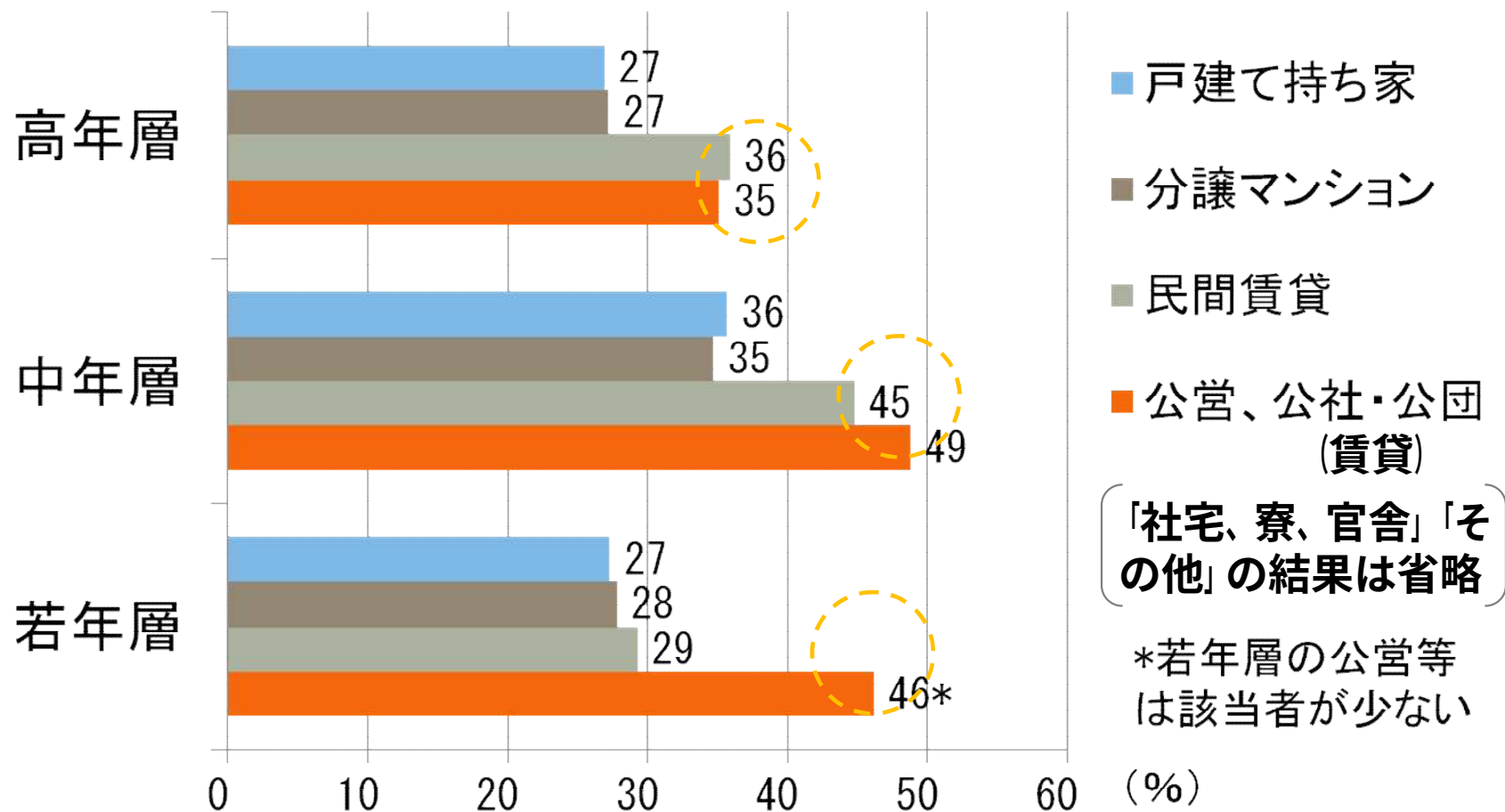
➡ 孤立割合は、独居者のほうが同居者がいる人より低い傾向があるが、高年層の独居男性ではこの傾向がみられない（孤立高め）

【年齢・エリア別】 孤立者の割合（％）



➡ どの年齢層も、エリアによる差はあまりない

【年齢・住居形態別】 孤立者の割合（％）



➡ 公営住宅・団地、中・高年層では民間賃貸でも高め。
経済状態による差を反映？

Ⅲ 調査結果



1. 孤立の状況

2. **栄養・運動**

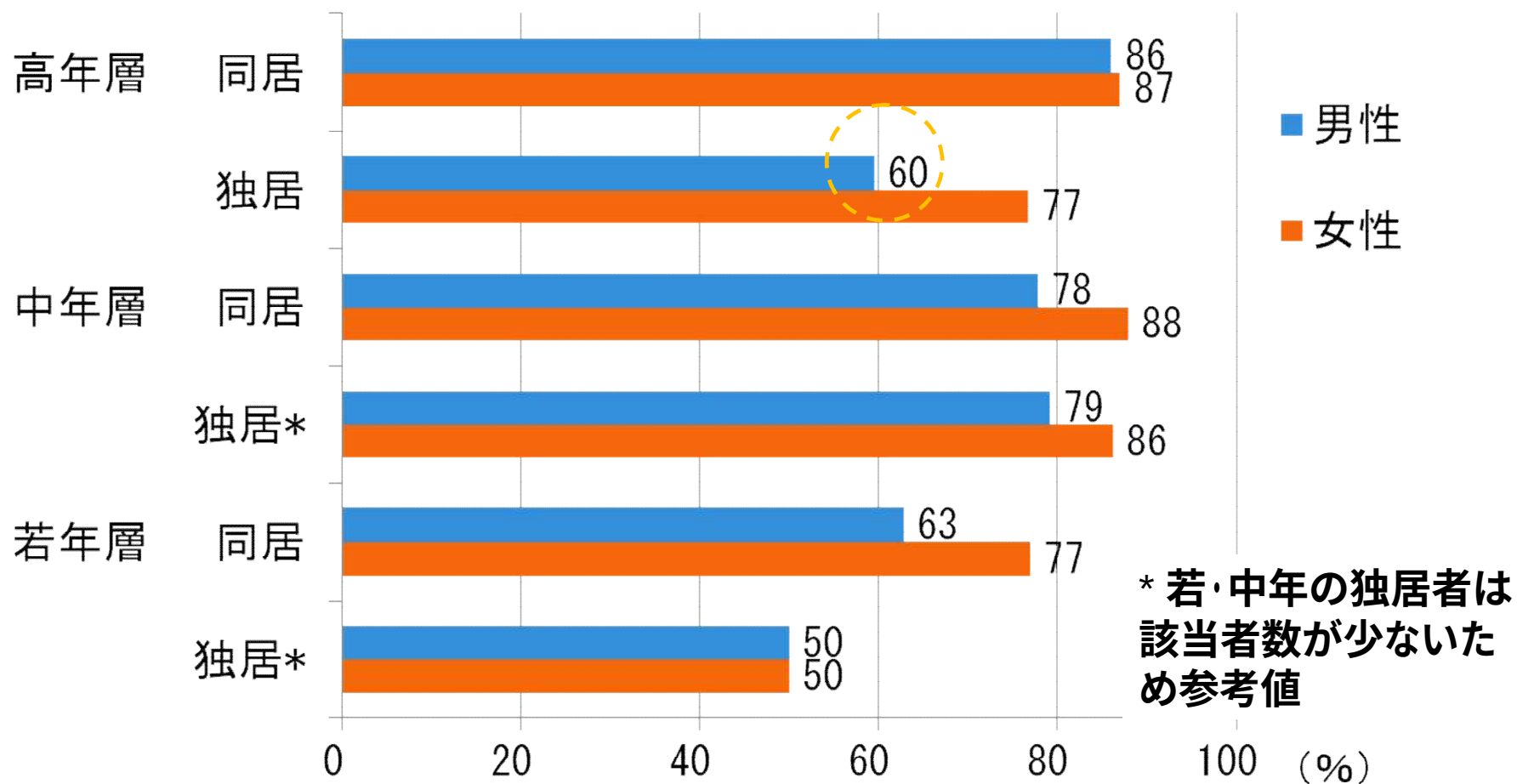
3. 団体・公的機関とのつながり

4. 居住地域の評価

5. 今後の生活への不安



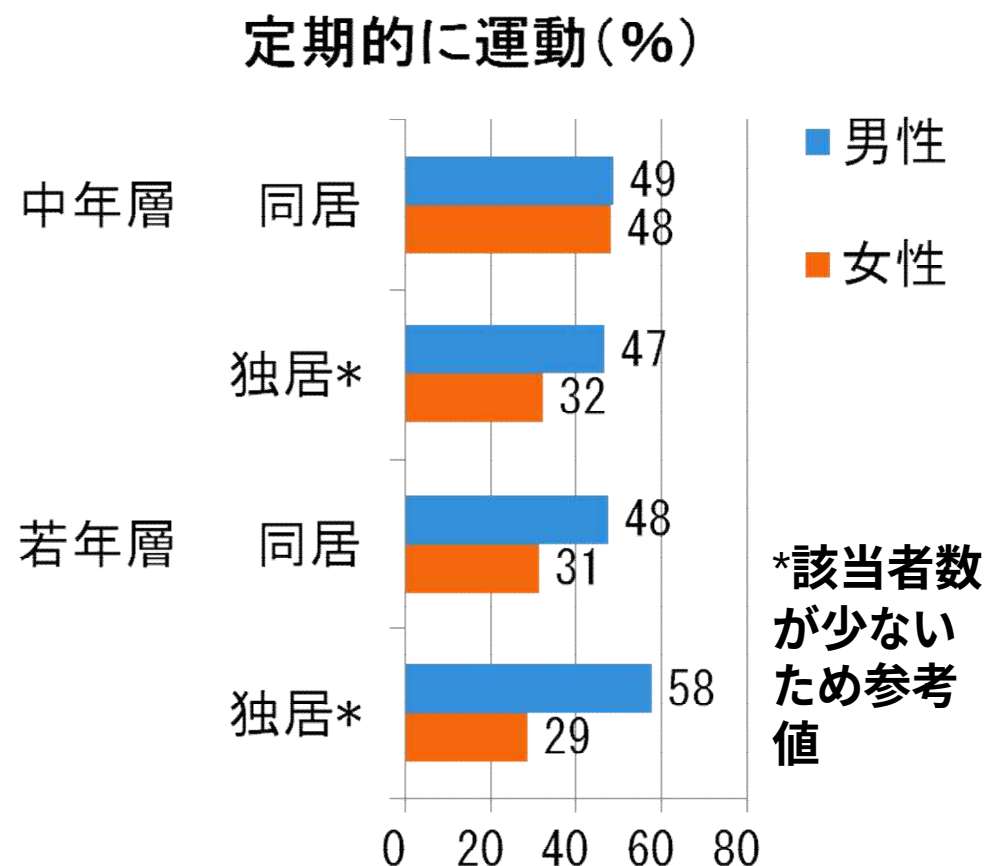
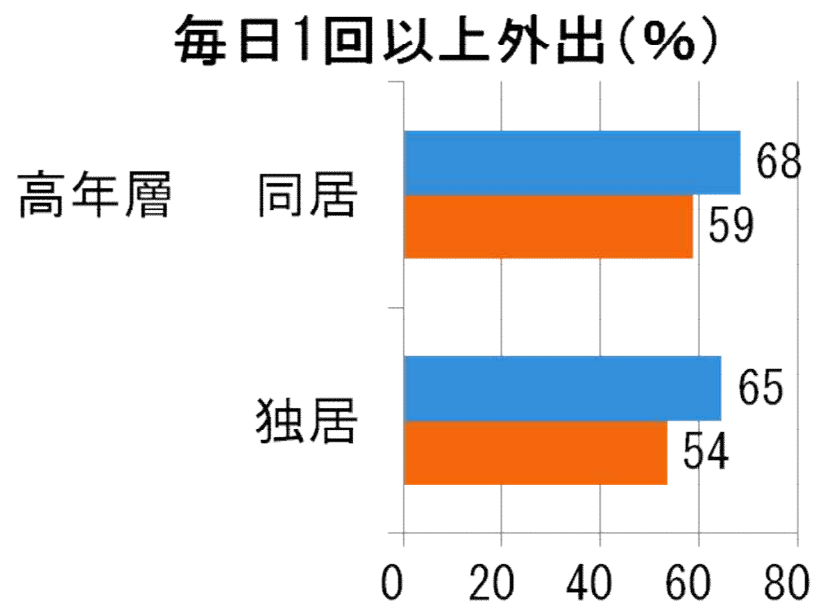
【年齢・世帯・性別】 栄養バランスの良い食事をしている(%)



➡ 若年層や、高年層の独居男性では、栄養バランスが良くない傾向

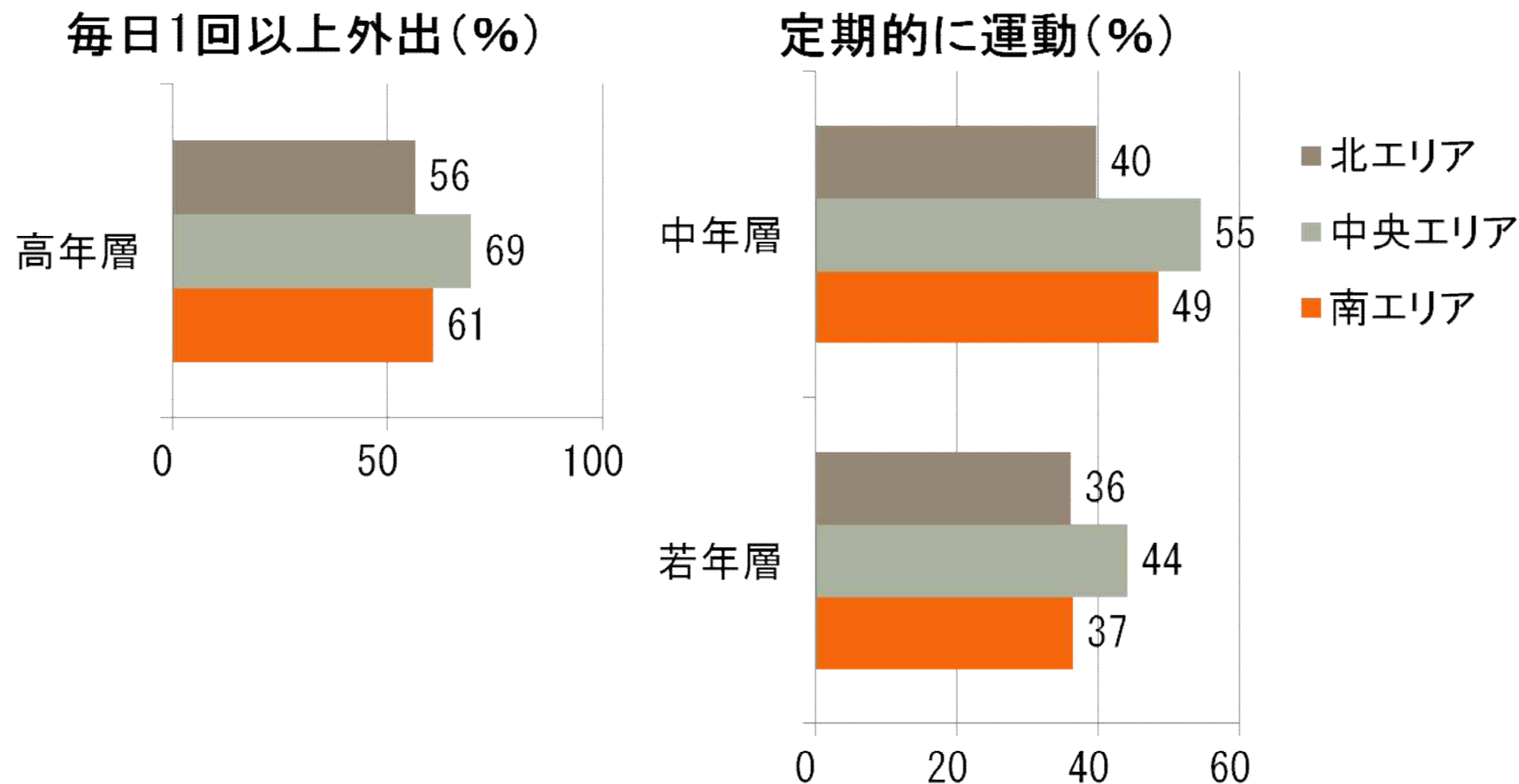
【年齢・世帯・性別】

外出（高年層）/運動（若・中年層）



➡ 高年層の外出、若・中年層の定期的な運動 (1回30分以上の運動を月に1回以上) とともに、男性のほうが女性より実施率が高い

【年齢・エリア別】 外出（高年層）/運動（若・中年層）



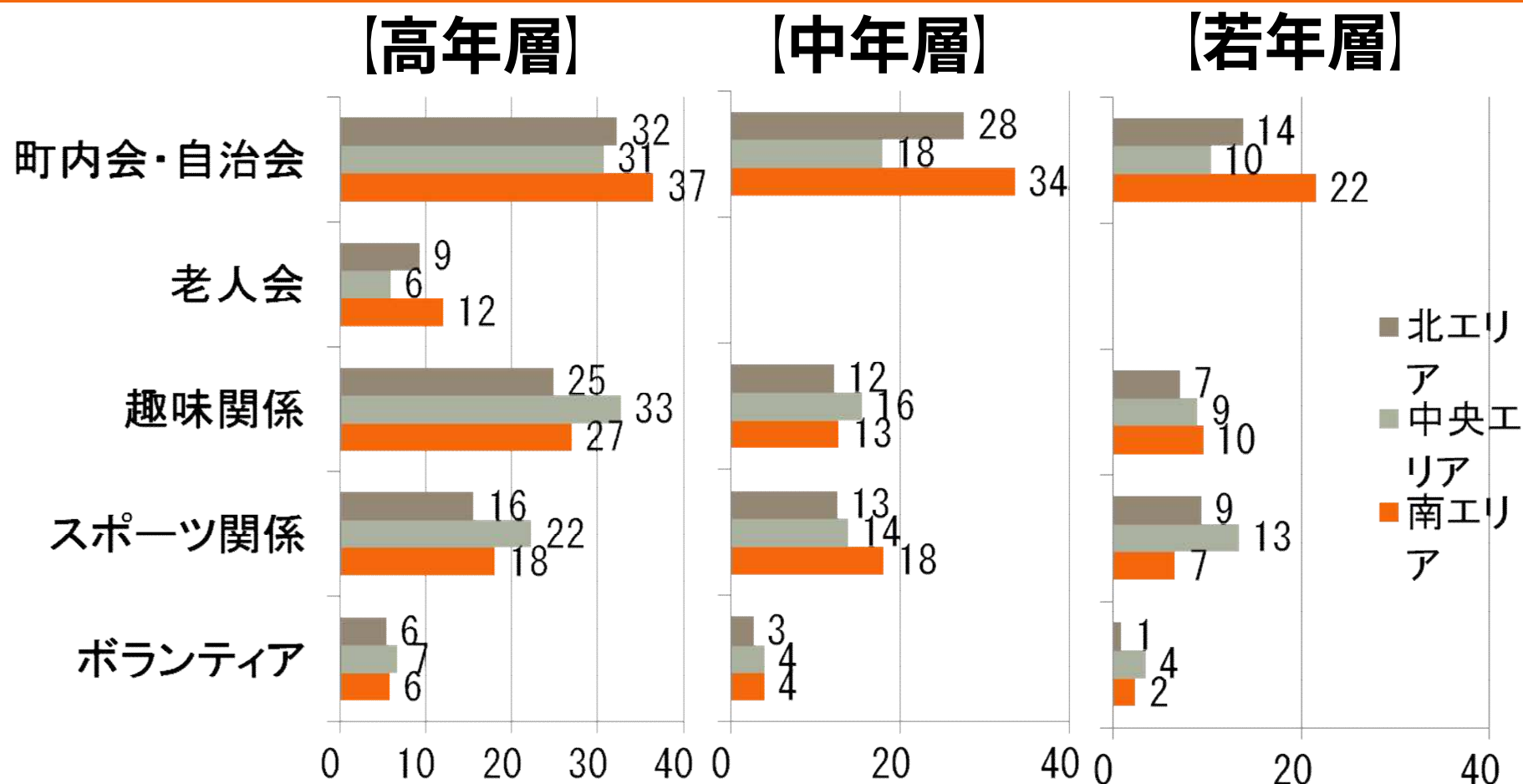
➡ 実施率は、中央エリアが最も高く、北エリアが最も低い。

Ⅲ 調査結果

- 1. 孤立の状況
- 2. 栄養・運動
- 3. 団体・公的機関とのつながり
- 4. 居住地域の評価
- 5. 今後の生活への不安

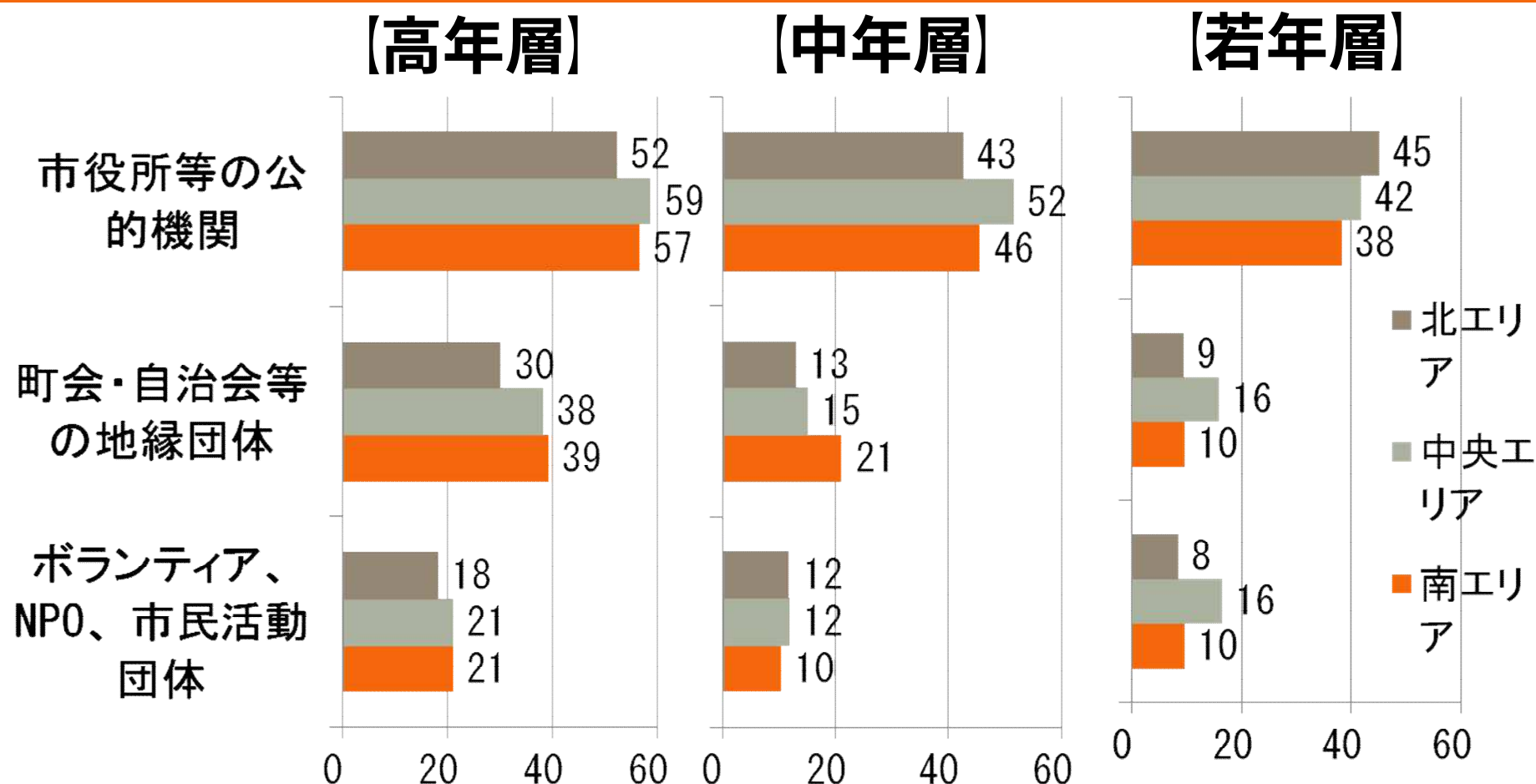
【年齢・エリア別】

グループ・団体への加入割合（％）



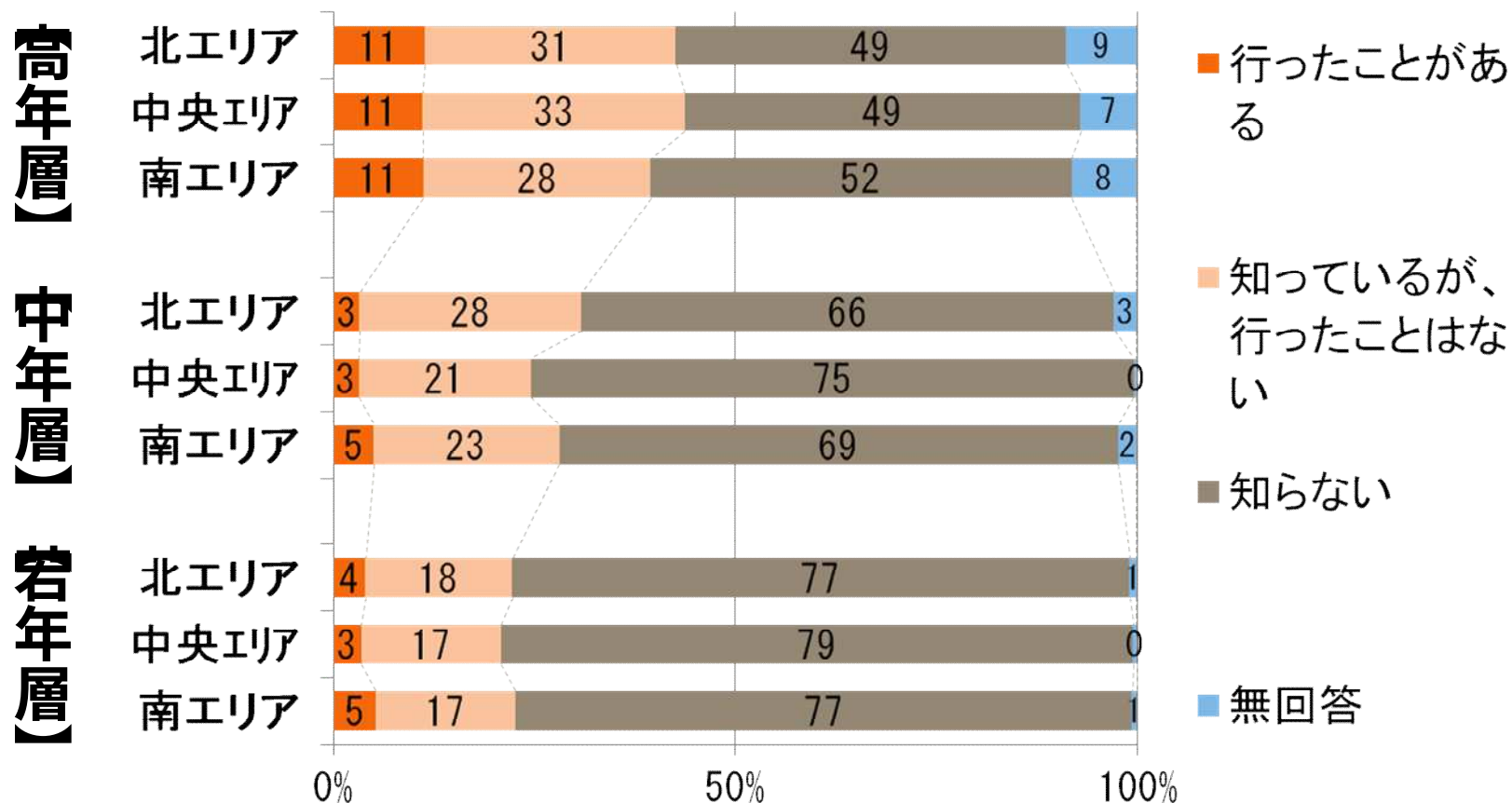
➡ 若年者ほど加入率が低い。町内会や老人会は南エリア、趣味・スポーツ関係は中央エリアで加入率が高く、北エリアはいずれも低め。

日常生活で 問題や心配事があるとき、 大いに/ある程度「頼りになる」 (%)



➡ 若年層ほど公的機関や団体への信頼度が低い。特に、地縁団体を信頼する割合は、高年層の半分以下。

地域包括支援センターの認知度



➡ 地域包括支援センターを知っている人は、高年層で4割程度。エリア差はあまりない。

Ⅲ 調査結果



1. 孤立の状況
2. 栄養・運動
3. 団体・公的機関とのつながり
4. 居住地域の評価
5. 今後の生活への不安

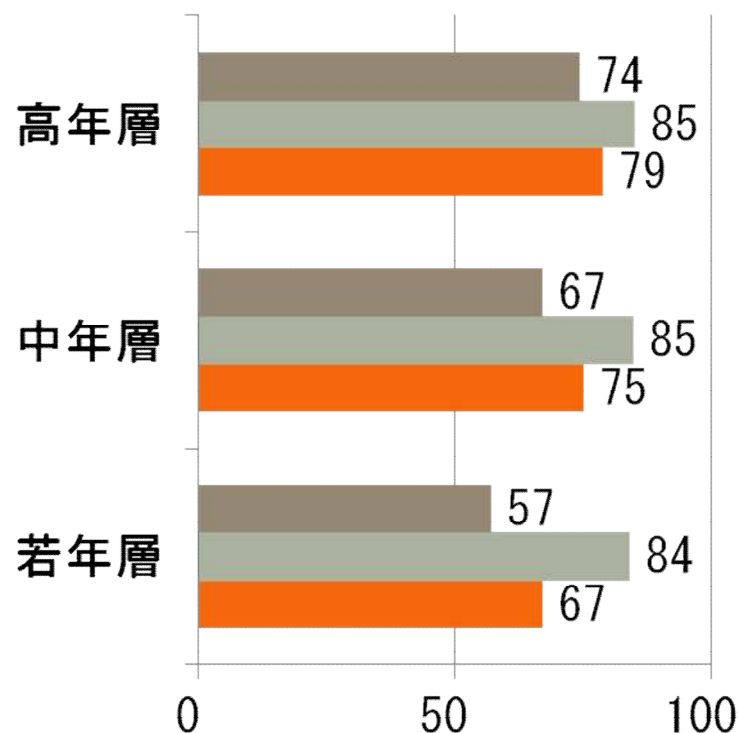


【年齢・エリア別】

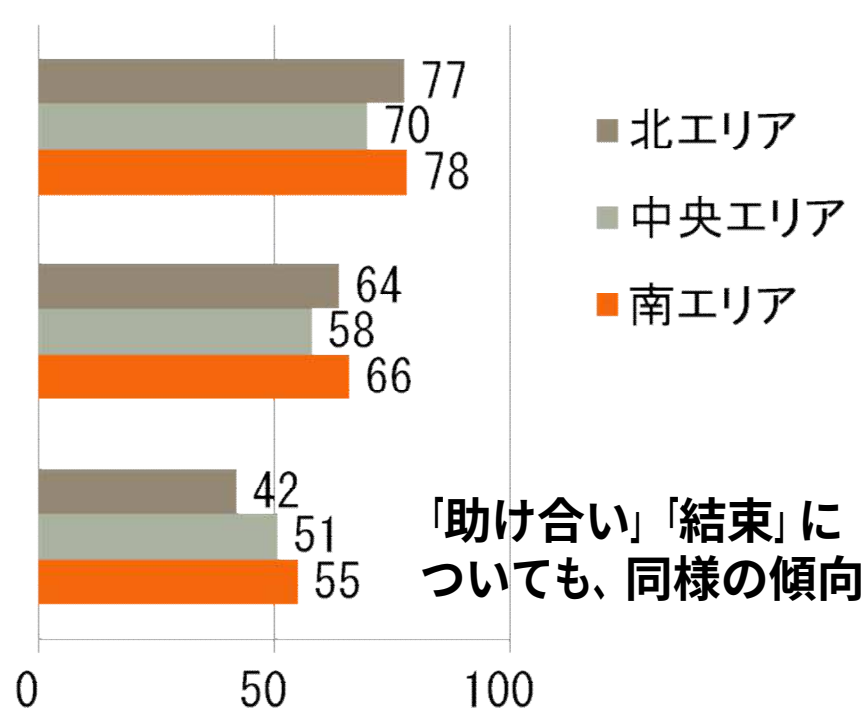
安全性・住民同士の関係性

「そう思う」＋「どちらかというと思う」

「私の住んでいる地区は
とても安全である」(%)



「私の地域では、お互いに気軽に
挨拶を交わし合う」(%)



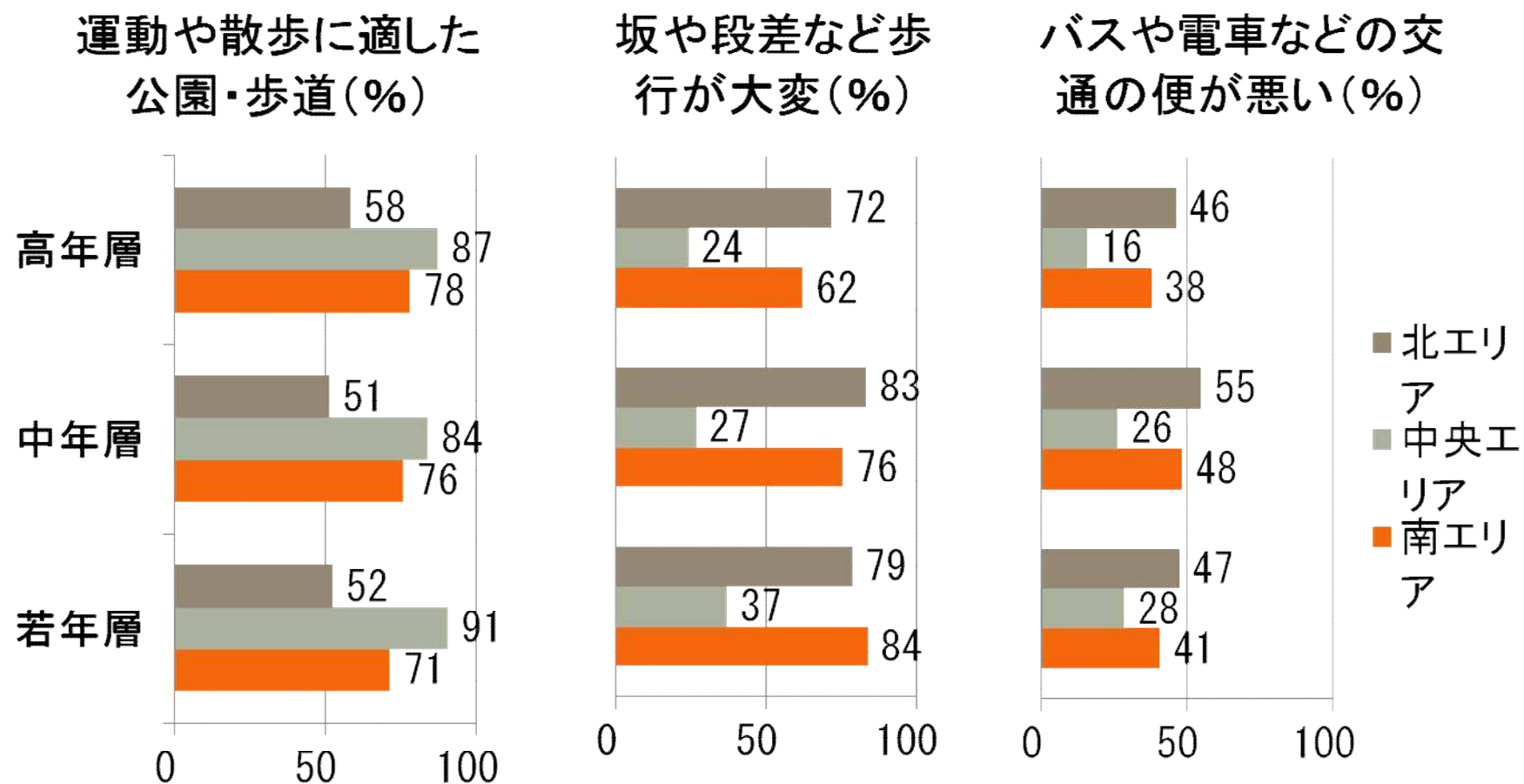
「助け合い」「結束」に
についても、同様の傾向



中央エリアは安全性の評価は高いが、近隣づきあいは南・北エリアのほうが有る傾向 (若年層は北エリアでは低い)。

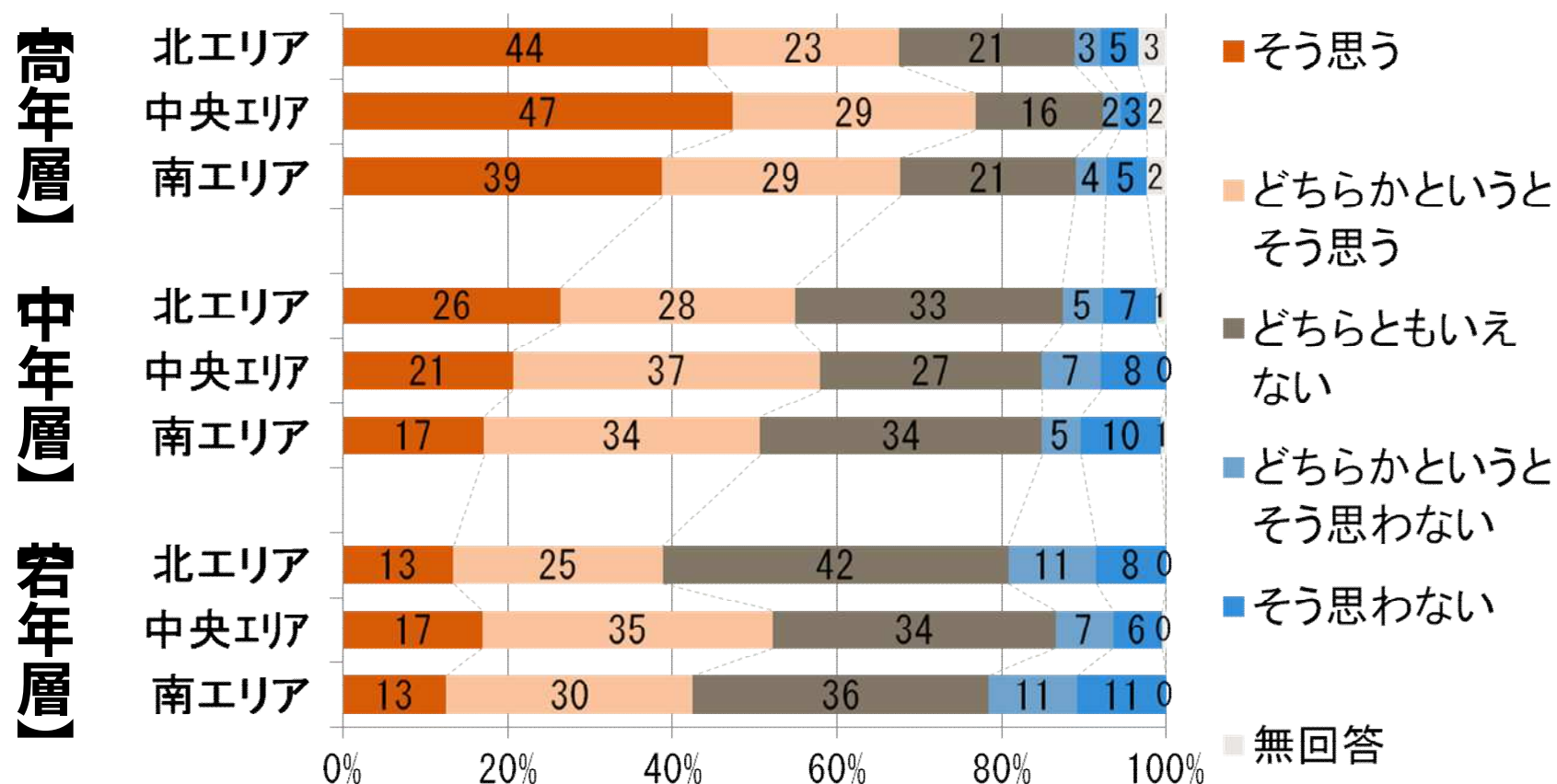
物理的環境（自宅から1キロ以内）

「たくさんある」＋
「ある程度ある」



➡ 中央エリアは外出に適した環境として高評価。北エリアは評価が低め

「将来もいま住んでいる地域に住み続けたい」 (%)



➡ 居住継続意向は高年層ほど高い。エリア別では中央エリアで高め

Ⅲ 調査結果

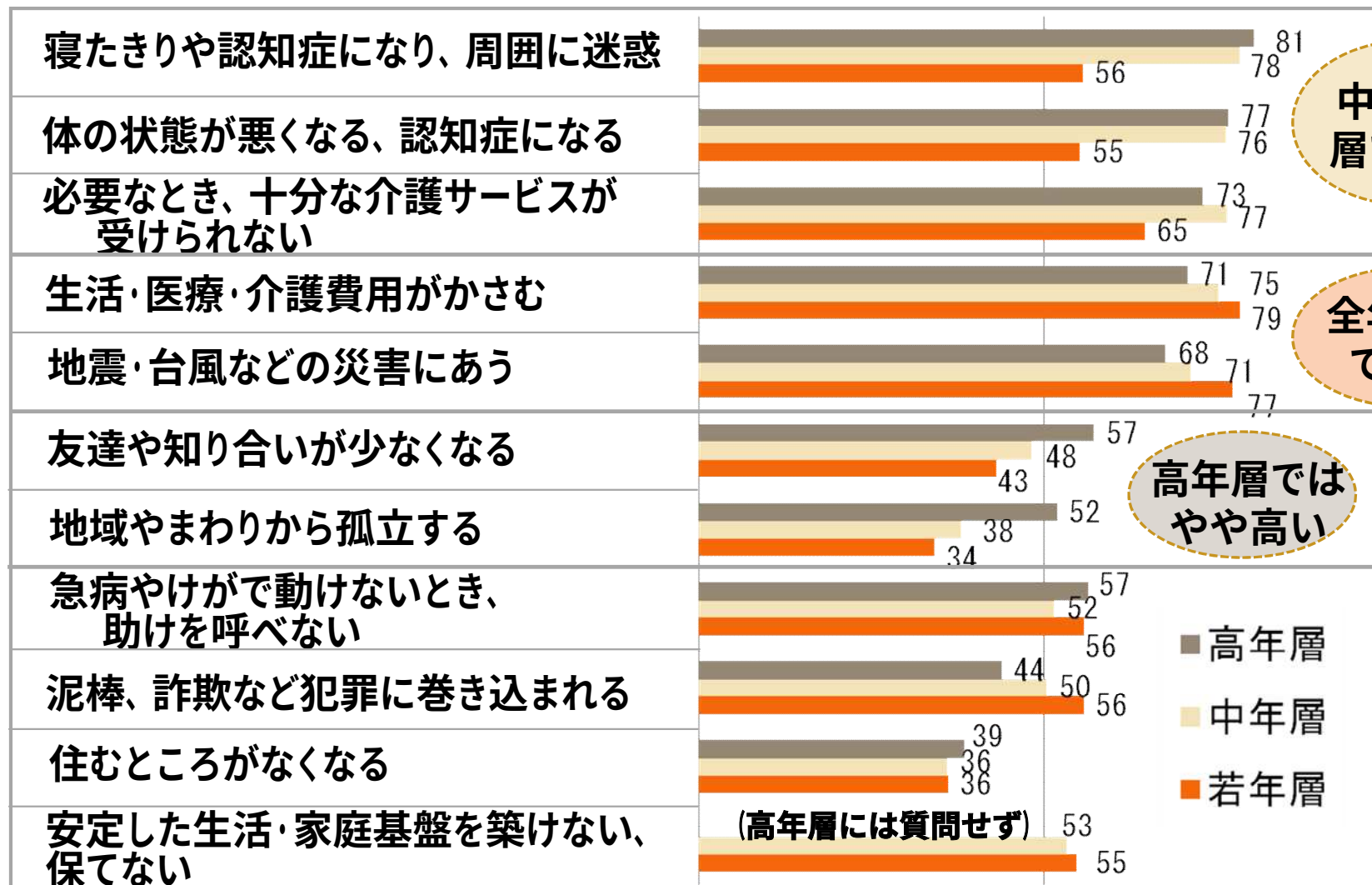


1. 孤立の状況
2. 栄養・運動
3. 団体・公的機関とのつながり
4. 居住地域の評価
5. 今後の生活への不安



【年齢別】

大いに/やや「不安がある」 (%)



中・高年層で高い

全年齢層で高い

高年層ではやや高い

■ 高年層
■ 中年層
■ 若年層



まとめ



年齢・エリア別にみた特徴や課題

∞ 高年層 (65歳以上)

- 別居親族や友人・近所との交流が乏しい孤立者の割合は、男性 (特に独居男性) や、賃貸住宅居住者で高い。ただし、女性でも80代以降は孤立者や孤立感をもつ人の割合が高くなっている。
- 独居男性では、食事の栄養バランスにも注意が必要。

∞ 中年層 (40～64歳) ／ 若年層 (20～39歳)

- 中年男性は、今後、仕事から引退後に、友人や地域の人との交流を増やせるかが課題。
- 若年層は、上の世代に比べ、主観的な孤立感が高く、地域団体への関与度が低く、食事や運動習慣にも課題。
- 居住継続意向をどう高めるか。

∞ エリア別特徴

- 中央エリアは地域環境への評価が高く、活動的な住民が多い。居住継続意向も高いが、近隣住民同士のつながりは、南エリアのほうが強い。北エリアは、団体参加、外出・運動の実施率ともやや低い。